



東工大パタゴニア遠征隊 1968-69

あえて最難関に挑んだワンダーフォーゲル部の学生たち

通学途中のスキマ時間、スマホの小さなブラウザから地球の反対側の絶景を覗くことができるようになりました。知らない国のニュースであっても、ありとあらゆる情報は瞬時に手に入り、世界は狭くなったと言われています。海外航空券は少しアルバイトに励めば気軽に購入でき、旅をすることは、ウェブ上に投稿された画像をなぞるだけの行為になってしまいました。誰かの模倣に過ぎない経験は、もはや、好奇心を刺激するものではありません。今、あえて未知の世界を拓こうとする人は少なくなってしまうように感じられます。全てのものが易々と入手できるようになった便利な時代、我々を新たな扉へと衝き動かす原動力とも言える、大きな夢を描くこと、創造力を培うことそのものが難しくなっているのかもしれませんが。2019年5月、日本の元号は、平成から令和へと移り、あちこちで「新たな時代の幕開け」と叫ばれています。新たな時代を切り拓く次の世代へ向け、今回のとっておきメモ帳では、壮大な夢に挑んだ本学の先輩方を紹介します。

夢のはじまり

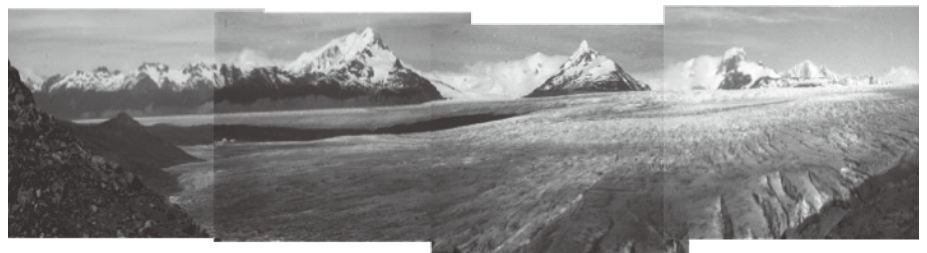
1968年、遡ること半世紀。東京工業大学ワンダーフォーゲル部の学生4人が、果てしない夢とも思える冒険を自ら発案し、実行までこぎつけました。その夢とは、学生の力だけで、未知の地である南米パタゴニア最大のウプサラ氷河（図①）を探索し、未踏の峰に立ち向かうこと―。1960年代、南米パタゴニアは「地図上の空白地帯」、秘境そのものでした。ワンダーフォーゲル部の学生たちは、その空白地帯に目を付け、空白を自分たちの力で埋めるという夢を抱いたのです。東京工業大学ワンダーフォーゲル部の名前で発行された計画書には、「南米パタゴニア地域の探検と工業調査が目的」と記されています。しかし、この4人の若者たちの真の動機、それは、「不完全燃焼で終わりがたくなかった」から。学生生活をもっと濃密な時間にしたいと、最も困難な選択をしたのは、他ならぬ彼ら自身でした。パタゴニアの他に名前の挙がった候補地は、北極カナダ、アイスランド、インドヒマラヤ…。当時、アルゼンチンとチリは、国境紛争をしていたため、両国にまたがるパタゴニアのまともな地図は刊行されていませんでした。そこで、何もせずに卒業するという選択肢が普通のところ、この学生たち

は、クラブ活動の引退前に、南米の秘境を冒険するという、「一番の未知」に挑むことを決意したのです。

恩師 川喜田先生との出会い

1967年7月12日、藤井理行（出発当時、土木工学科4年）、高橋徹（建築学科4年）、宮崎理彦（機械工学科4年）の3人は、大学近くに位置していた宮崎宅に

てパタゴニア遠征隊の結成式を行いました。その後、1年余りに渡る入念な準備期間の後、上記3人に加え、鈴木清高（土木工学科3年）を含めた4人で南米パタゴニアへと旅立ちます（図②）。彼らの計画は、当時の人びとにとっても、無謀な夢のように思われたことでしょう。部活動の先輩たちからは「ワンダーフォーゲル部の活動としてパタゴニア遠征を支持していくことに抵抗あり」と支援に消極的な態度をとられ、大学側



(A) 1968年東工大パタゴニア遠征隊によって撮影されたウプサラ氷河



(B) 2004年に記録された氷河 [Source: "An Inconvenient Truth" by Al Gore]

- ① 縮小するウプサラ氷河（1968-2004の変化）。当時東工大パタゴニア遠征隊によって撮影された写真は、今では、貴重な学術資料の一部である。



② 東京工業大学ワンダーフォーゲル部のクラブ活動の一環として結成されたパタゴニア遠征隊。実際に遠征した4人の学生。

からも「東工大」としての活動に難色を示されるなど、周囲からは、必ずしも賛同ばかりを得られた訳ではないようです。

夢の実現に向けて、学生たちは1967年10月18日、文化人類学の講義の後、この科目を担当していた川喜田二郎教授にパタゴニア遠征の計画を話します。川喜田二郎教授といえば、現在では、ブレインストーミングの整理法であり、川喜田教授のイニシャルを冠した「KJ法」の開発者として有名ですが、その発想の源は、豊富な野外調査から得た知見でした。川喜田教授は、ご自身の経験から、学生たちが学外へと飛び出し経験を積むことへ理解を示しました。そして、この出会いこそが、パタゴニア遠征隊にとって、のちに様々な逆境をくぐり抜けるための切り札となったのです。

第一の関門は、パタゴニア遠征について、大学側了承を得ることでした。壮大な夢の実現には、時として個人の力だけでは無力なこともあります。外国の未踏の地を探検するということは、外務省や大使館を通じた交渉を行わなければならないということであり、政治的な力や組織の力も必要だったのです。川喜田教授は学生たちに、大学を味方に付けるためのアドバイスを授けました。1968年2月末、川喜田教授のアドバイスを元に、学生たちは、「パタゴニ

ア遠征委員会」を学内で発足させるため、教授の連名による推薦文の発行を試みます。次の文章は、推薦文の原案です。

(推薦人の立場で学生が作った下書き)

このたび本学学生5名からなる海外遠征が企画されました。この計画はこの種の活動に対する東京工業大学の今までの消極性を打ち破る一つの事業ではないかと思えます。ともすれば工科系単科大学の学生は中の狭い人間がでしがちで、それが現在の東京工業大学の性格の一面を示しています。私達は、彼等のいわば青春を懸けたともいえるこの活動にそういった観点から賛意を表し十分に意義を認めています。又、次の世代を担う若者にこのような活動を通じて、彼等の可能性を探らせ、異なった社会環境を肌で感じとらせる事は、現在の大学教育では得られぬ人格の形成という面で大きな意味があると確信しています。

いかがでしょうか。半世紀前のものとは思えない内容だとは思いませんか。令和になった今も、東工大生の本質は、昭和の時代と何も変わっていないようです。異なる点といえば、平成から令和の時代では、大学をあげ「グローバルリーダー」の育成に努めているということでしょう。50年前に学生たちが「現在の大学教育では得られぬ」と発案したアイデアは、50年の時を経て、大学教育の中心に組み込まれてきたのです。

夢と現実の狭間で

政治的な根回しが整いつつある中、次の関門は、資金繰りでした。学生たちは、東工大の他の教授を通じて蔵前工業会(東工大の同窓会)の紹介を頼みましたが、断られてしまいます。そこで、学生たちは、遠征資金獲得のため、電話帳から目ぼしい企業をリストアップし、寄付を募りに、体当たりで企業をまわりました。時には、地元のツテも使い、当時の運輸大臣の事務所へ赴き、鉄鋼船に乗れないかどうか聞くことも。時に、東工大出身の政界や財界の大物に突撃し、大企業の会長室にて、後輩が何かおねだりをしているから面倒を見てやって、と声を掛けてもらえたことや、銀座・資生堂パーラーで食事を奢ってもらえるというラッキーなことも。しかし、世の中の暗黙のルールや仕組みを知らない無鉄砲な若者たちのすること、はじめは苦難の連続でした。彼らの日記には、例えば、

1968年5月11日 昨日の寄付要請の態度が悪かったとの苦情を受け、修復に出かける。いい勉強になる。

など、当時の様子がありありと目に浮かぶ、実直な言葉が綴られています。寄付集めに苦戦を強いられる中、状況を打開すべく、学生たちは、川喜田先生の指導のもと、先生の提唱するブレインストーミングの手法で、何度も議論を重ね、どうしたら寄付を募れるか、遠征の目的を精査していきます(図③)。学生たちが実践したブレインストーミングの整理法こそが、のちにKJ法と呼ばれ広まっていく方法です。結果、遠征資金約268万円のうち、132万円を集めることに成功。1968年の大卒初任給は、月給3万600円ほどですから、これだけの寄付を集めるためには並々ならぬ苦労があったに違いありません。東京オリンピック(1964年)後の経済成長著しい時期とはいえ、1米ドルは360円の固定相場。海外旅行が今ほど身近ではない頃のことです。

つかの間の楽園

1968年9月3日、結成式から1年2ヶ月後、学生4人は1年間の休学を表明し、いよいよ横浜を出航します。渡航費用を抑えるためには、例え長い道のりになっても、船旅がベストの選択でした。4人は、

1968年11月9日(土)

つまらない一日。生きるしかばねとは真に我々の事。

4人は、ダメ元で、ぶらじる丸に同船していたアルゼンチンの陸軍大佐夫人を訪ねました。すると、何と、陸軍省の通関責任者に便宜を図ってもらうことができたのです。その結果を受け、在アルゼンチン日本大使館と日本の外務省の緊迫したやり取りが続きます。インターネットの無い時代、最も速い通信手段は「電報」。1968年11月15日、在日本大使館から外務省へ、学生たちに万一のことがあれば通関にかかる費用を東工大が請け負うという、東工大へ再保証を求める内容の電報が届きます。そのわずか4日後の11月19日、東工大から外務省へ、再保証するという「確約書」が送られます。当初はパタゴニア遠征隊へのあたりが強かった大学側から公式な「確約書」が短期間で発行された影に、実は、川喜田教授の「自分が責任をとる」という鶴の一声と、テキパキと駆けずり回ったワンダーフォーゲル部同期の岡部力也さんの活躍(日本からパタゴニア遠征隊を支えてくれた事務局長)があったのです。長期に渡る交渉の末、パタゴニア遠征隊は、11月25日ブエノス・アイレスを出発し、パタゴニアへ向かいます。通関に35日を要するというこの出来事は前代未聞の事態でした。

氷河を丸ごと、いただきます！

船上での出会い、恩師のバックアップを受け、前代未聞の難関もクリアし、パタゴニア遠征隊は、氷河を抱えるブランチョン山の登頂を目指します(図⑤▲&⑩)。続いて、この冒険のハイライトであるウブサラ氷河へ。

「あのカキ氷はうまかったなあ！」

「アズキの缶詰をカキ氷にしてね、山の上で。氷河だから」

当時の様子を語りながら、遠征に出かけた元学生2人は、50年後の令和のある日、感嘆の声を漏らしました。遠征隊は、企業からの寄付のひとつであるアズキの缶詰を、何とウブサラの氷河にのせ、即席でカキ氷を作り、雄大な自然を背景に、氷河を丸ごと味わったのです。50年経った今で



⑤ パタゴニアとフェゴ島(南端部)での探索ルート。セロ・ソンプレロ、ポルベニール、リオ・グランデ、ウシュアイアはフェゴ島の都市。

も忘れられない「最高の味」。その前の苦勞を思えば、その味も一塩だったことでしよう、想像に難くありません。

その後は、モレノ氷河に浮かんで見える湖をゴムボートで探索(図⑥)。炭坑の町を見学し、マゼラン海峡を渡り、フェゴ島へ。当時は学生運動の真っ只中。途中の宿で、激しさを増す学生運動の闘争のニュースを目にし、自分たちは、こんなチャラチャラして良いのだろうかと思ったそうです。フェゴ島では、石油精製工場の見学、オリビア登山を実施。現地の若者との交流も行い、1969年2月10日、各々異なるルートで帰国の路に着きました(図⑤)。

大人は待っている

東工大の学生たちが成し得たこのプロジェクトは、多くの新聞・雑誌でも取り上げられました(図⑥&⑦)。その中のひとつに、1969年6月8日発行の「今週の日本」という週刊誌がありました。次の文章は、学生たちを信じ、支え続けた川喜田教授が記事の一部として寄稿したものです。

開拓者魂をたたえる

川喜田 二郎

(執筆当時、東京工業大学教授)

人間は自然に触れてこそ、ほんとうに人間らしくなる。その自然も、飼いならされた自然でなくなまの自然だと、申しぶんない。しかしそんな自然は私たちの日本にはもうほとんどなくなった。悲しいことだ。

東京工業大学ワンゲル部の遠征チーム4人は、パタゴニアにでかけた。そこには沈黙する荒原や原始の森、純白の氷河と黒い岩稜と碧空がある。何とも羨ましい話だ。しかしこの諸君がそこに到るまでには、涙ぐましい苦勞の連続があった。なけなしの金をアルバイトの中からはたき、頭を下げて募金回り。学内の先生方の説得となれない渉外や通関の仕事。ときには「礼儀知らず」とオトナにこづき回されつつ、装備や食糧の準備をする。まさに闘いの連続だったろう。

この苦勞が本物のチームワークを育てていったようだ。そこで、ある日、「無事に帰ってきましたよ」と、ニコニコ顔を現してくれることになった、彼らの若さの開拓者魂を私は愛する。そしてたたえる。彼らの戻ってきた



⑥ 毎日グラフ（1969年3月23日刊行）で特集された見開きページの拡大。「白い秘境パタゴニア」という見出しが表紙を飾っている。モレノ氷河由来の流氷が浮かぶアルゼンチナ湖にゴムボートを繰り出した。青く輝く氷塊が目前の湖面をうずめ、魂も凍りつくほどの光景は隊員たちの心を別の次元に引き込んだ。なんと素晴らしい世界であろうか！

日本の大学には、バリアードとヘルメットとゲバ棒があった。何ともおもしろい対照ではないか。

遠征から数年後、学生たちは遠征の経験と、川喜田教授の言葉を胸に、進路は違えど、各々異なる分野で活躍していきます。ある者は、極域科学分野のリーディング研究者に。またある者は、グローバルに活躍する技術者に…。この遠征は、自由な発想に基づく創造力の育成、多様な環境の中での人格形成、困難な課題へのチームワーク力と問題解決力の滋養な

ど、1年の休学を埋め合わせ余りある多くの価値あることを生み出しました。東工大生の活動としては、クラブ活動をベースに自主的に計画し実行した、初の海外での試みでもあります。グローバルに活躍できる人材育成をスローガンに掲げる教育制度の渦中にいる皆さんに、知っておいていただきたい先輩方の偉業です。1年間の休学は、無駄なことと考える方もいるでしょう。多忙な現代社会において、与えられた課題を日々こなすだけでも精一杯かもしれません。ですが、目先のことだけに捉われず、自ら困難に飛び込んだ先輩たちのことを、頭の

片隅に留めておいてください。50年前を振り返って、今は大人になった元学生は言いました。

「大人は待っている」

と。時には「空気を読む」ことをやめ、気難しそうに見える年配者にぶつかって試してみてください。そして、ぜひ、博物館・資料館にも立ち寄りしてみてください。これまで気がつくことなかった新しい発見があるかもしれません。「今、無駄に思えること」が、この先の長い時間の中で、いつか小さなヒントになることでしょう。

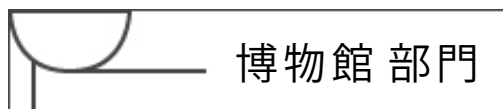
参考文献

- 1) Al Gore, "An Inconvenient Truth: The Crisis of Global Warming", Rodale Press, 2006.
- 2) 1969年6月8日発行 今週の日本 第38号。
- 3) 1969年3月23日刊行 毎日グラフ。
- 4) 1969年1月4日発行 毎日新聞。

2019年10月

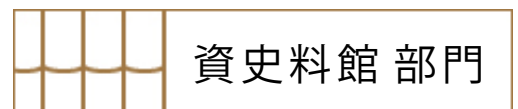
執筆：宮前知佐子

発行：博物館 資料館部門



博物館 部門

東京工業大学 博物館



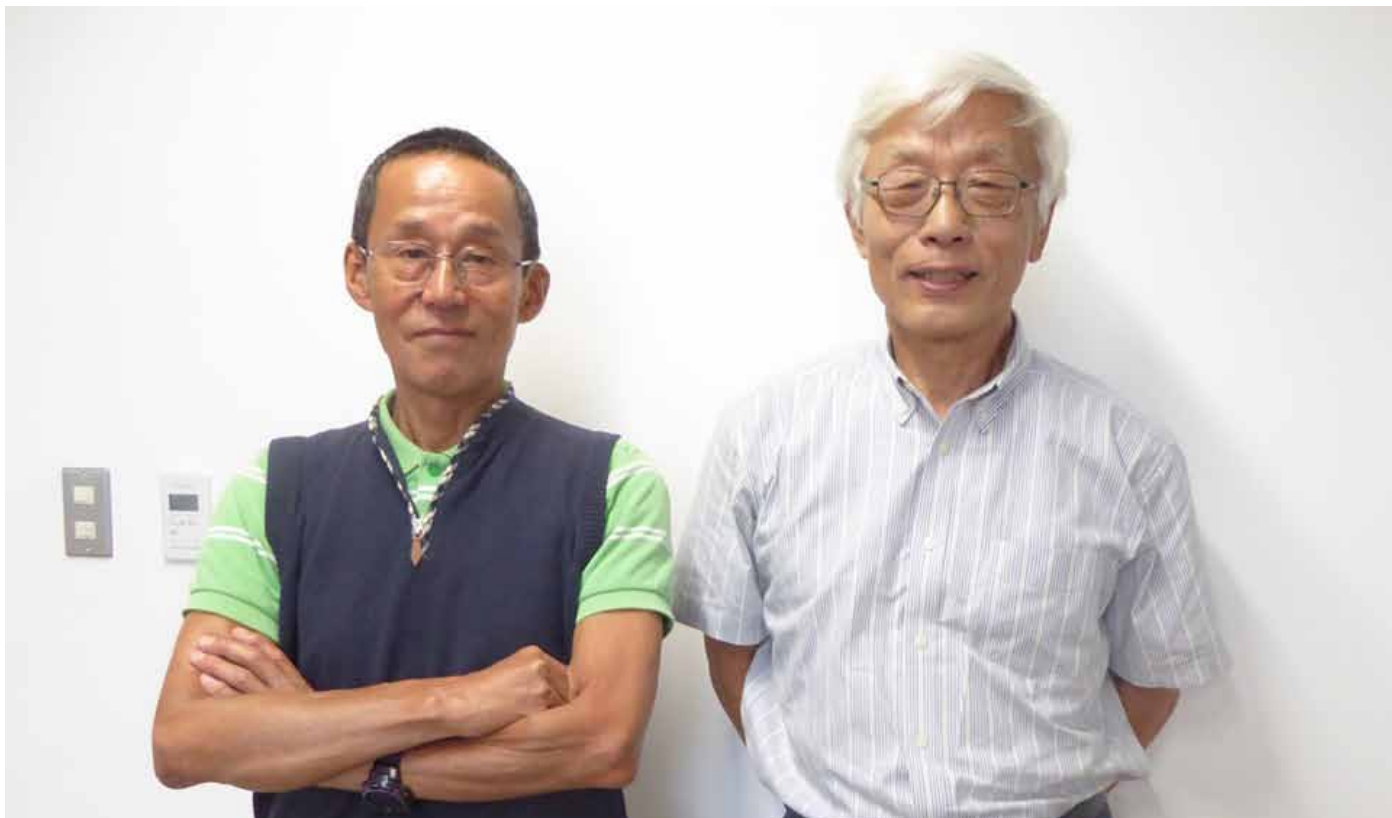
資料館 部門

152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3340 centsairy@jim.titech.ac.jp
http://www.cent.titech.ac.jp/

佐藤 勲（館長，総括理事・副学長）
山崎鯛介（教授，副館長，博物館部門長）
広瀬茂久（特命教授，資料館部門長）
奥山信一（教授，兼任）
金子寛彦（教授，兼任）
野原佳代子（教授，兼任）
大竹尚登（教授，兼任）

亀井宏行（特任教授）
宮前知佐子（研究員）
酒井正好（事務員）
佐々木裕子（事務支援員，学芸員）
桐明紀子（事務支援員，学芸員）
秋成美由紀（事務支援員）
渡辺菊乃（事務支援員，資料館）

鎌田祐輔（事務支援員，資料館）
本間英子（事務支援員，資料館）
桑原千佳（事務支援員，資料館）
渋谷真理子（事務支援員，資料館）
広報・社会連携課（博物館担当）
堤田直子（課長）
太田邦之（社会連携グループ長）
岡部史郎（事務員）



⑧ 氷河でつくったカキ氷の美味しさは一生忘れられないと語る元パタゴニア遠征隊のお二人。



⑨ 本館正面前のミニ展示（2019年7月～11月実施）。



クリスチーナ牧場からアニタ湖畔へ セロ・ブランチョン(2405)が迫ってくる



セロ・ブランチョン登頂。後はセロノレテ